

街・町・まち物語（9） 大阪再生は文化の立て直しから＝池田 知隆さん（大阪自由大学理事長）

建設ニュース掲載

<https://www.constnews.com/?p=52062>

2018.04.06

小・中学生の学力は全国の最下位グループ、嫌いな都道府県ランキング（週刊ダイヤモンド調査）ではトップ、文化不毛の都市——とさんざんに言われている大阪だが、いつになったら汚名は返上できるのか。あきらめの声が多い中、「いや、大阪にはまだまだ潜在的な力が眠っている」と再起を信じている人たちも少なくない。そんな一人が大阪市教育委員会の元委員長で『[大阪自由大学](#)』を立ち上げた池田知隆さん（69）だ。大阪とは元々どんな街だったのか学び直し、そこから再出発すべきだという。そんな願いを込めて今月10日から



からスタートする『新・大阪学事始（ことはじめ）講座』に賭ける思いを語ってもらった。（聞き手：本社編集主幹・朝野富三）

—大阪の衰退はいつから？

「やはり明治維新ですね。都が東京になり、日本の物流と情報のセンターだった大阪の機能がそっくり移ってしまいました。江戸時代、“天下の台所”だった大阪には人もカネも集中していて、たとえば両替商の鴻池の資産は幕府の全財産に匹敵していたと言われていました。一企業の資産が政府の資産と同規模だなんて想像できますか？そうした財力に支えられ、文化や学問でも大阪がダントツの



都市だったのです」

【設立準備段階での講演風景（講師・
鷺田清一元大阪大学学長）】

—大阪の学問？

「江戸時代に私塾が全国各地にできます。還俗した僧侶や武士、学問を志す町民などが開いたのですが、大阪は特に盛んだった。豪商たちがカネを出し合っ
て作った『懐徳堂』はその代表例です。『五同志』と言われた有力な町人が1
724年（享保9年）に今の大阪府中央区今橋につくったのですが、“学主”今
でいう学長のもとに教授、助教が講義を担当します。幕府は『大阪学問所』に



認定しますが、朱子学を基本にした、あくまで町人による自由な学風の学校だったんです」

【懷徳堂碑】

——そこから多くの人材が輩出された？

「山片蟠桃（やまがたばんとう、1748－1821）は近代的、科学的な思考をする学者で、西洋の天文学を学んで地動説や万有引力説を唱えています。無神論で、日本の神国論も否定しています。富永仲基（とみながなかもと、1715－1746）も合理主義者で儒教、仏教、神道を堂々と批判した学者で、病弱で32歳で亡くなりますが、彼の思想に影響を受けた若者は多かったのです。町人出身者が大半でした」

——そういえば、大阪・淀屋橋には今も『適塾』の建物が残っていますね。

「緒方洪庵（おがたこうあん、1810－1863）が開いた、当時の西洋学問である蘭学の学校でした。大阪大学の前身とされています。身分に関係なく能力主義で最先端の医学知識を学ばせた適塾からは明治時代をつくった数多くの人材を生みました。慶應義塾を開いた福沢諭吉、日本赤十字社の礎をつくり、初代総裁になった佐野常民、内務省の初代衛生局長で日本の衛生行政を確

立した長與専齋をはじめ、まさに多士済々です。手塚治虫が『陽だまりの樹』



で描いた医師は彼の祖祖父の手塚良仙で、
ここで学んだ一人です」

【今も残る適塾の建物】

——なのに大阪は明治以降、没落の道をたどってしまった？

「いえ、そうでもないのです。1882年（明治15年）に大阪に近代的設備を備えた紡績会社が設立され、20社におよぶ紡績会社ができ、大阪は”東洋のマンチェスター”と呼ばれ、日本が世界最大の紡績大国に成長していく基盤になったのです。1923年（大正12年）に関東大震災が起きて東京が大打撃を受けたこともあって翌年には大阪の人口は全国一になります」

——「大大阪」の時代ですね。

「数多くの文化人が東京から大阪に移り住んできました。作家の谷崎潤一郎なんかもその一人です。先端をゆくファッションやモダンな建築など、モダニズムと言われる文化が生まれて、心齋橋を歩く女性が洋装している割合が東京の銀座より高かったんですよ」

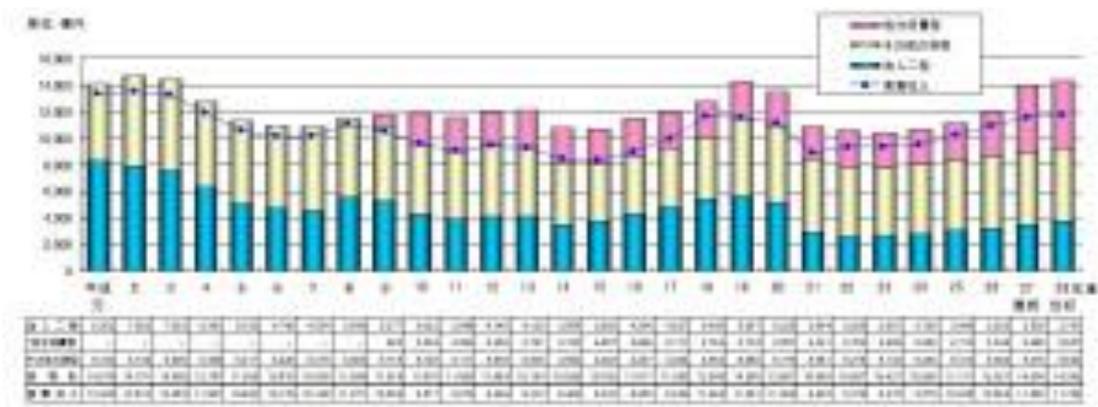
——大阪再生は”昔の夢”をもう一度、ということでしょうか？

「いや、違います。残念ながら戦後の大阪は目の前の課題を追うあまり、文化をおそろかにしてきたことは否定できません。特に前知事の時代はひどかったです。芸術・文化への補助金を切ったり、施設をつぶしていった。しかし、それは決して知事だけの問題ではないと思います。大阪の人たちはそれに明確にノーとは言わなかった。文化を守ろうと立ち上がらなかった。そのツケが回りまわって、ますます魅力のない都市になり、それが経済にもマイナスに作用するという悪循環に陥っています。先日、驚くような数字を知りました」

——それは？

「1989年に8300億円あった大阪府の法人税が、2016年には3700億円となっているのです。一時は2600億円台にまで落ち込んでいまし

【大阪府の法人税の推移】



た。そんな状況で、まだ東京を追っている。まず経済を立て直してから文化を、というのは逆です。東京とは違う新しいモデルづくり、新しい価値を生み

出していき、人もビジネスも集まる魅力ある街にするには、一見遠回りのように見えても文化の再興からなのです」

——『大阪自由大学』はその一環として立ち上げた？

「学校法人の大学ではありません。開かれた、自主的、自立的な市民の学びの場、つまり江戸時代の私塾の発想です。2012年に雑誌『上方芸能』発行人の木津川計さんに初代学長になっていただき、ポスドク、博士号を取りながら就職できない研究者や表現者、大学院生たちに発表の場を与え、リタイヤしたシニア層が彼らを支えていくことから始めようと、市民による文化・学問の場としてスタートしました」

——で、今年で6年目ですね。

「残念ながらまだまだ道遠しです。わかったことは、若い人たちが想像以上に過酷な状況に置かれているということでした。彼らは日々の生活に追われていて、余裕がなく、参加したくてもできない。これまでに43回にわたって『大阪精神の系譜』という連続講座を行ったり、映画、読書カフェなどさまざまな企画をしていますが、正直、カルチャーセンター化している実態があります。しかし、あきらめてはいません」

——新しいモデルの都市づくりというのはどんなイメージですか？

「関東は東京を中心とした同心円の都市です。それに対して関西は”共和国型”でしょうか。京都は美術、大阪は音楽、兵庫は演劇を特徴にした街づくりが可能です。ヨーロッパのような多様な文化が共生する文化圏をイメージするとわかりやすいかもしれません。その力が関西にはあるんです」

——そのために大阪の学問と文化を見直してみようということですね。

「今月からスタートの『新・大阪学事始講座』は毎週火曜日の夜、原則月3回で12月まで続ける予定です。第1回は二代目学長で元芦屋大学学長の倉光弘己先生の『大阪の風土と町人学』をテーマに話してもらい、それ以降は各界の専門の方たちに講師をお願いし、『大阪学再見』、『世界の中の大阪文化』、



『近代化の起業家精神』、『復興から成長、衰退へ』など魅力あるテーマがたくさん続きます。ぜひ聞きに来てください」

【講演風景（講師・尾池和夫京都造形芸術大学学長）】

(いけだ・ともたか) 1949年生まれ。早大を卒業し、毎日新聞社に入社。大阪本社学芸部副部長、社会部編集委員、論説委員を歴任し退社。2007年から4年間、大阪市教育委員会委員（うち2年は委員長）。同志社女子大学などで教えている。